
一部50円です

気になる他人の目



「みんなが笑うてやわ」と、何かにつけて母は近所の人々の評価を気にした。負けん気が人一倍強い母は、人からバカにされる事を嫌った。◆母は車で三十分近くかかる農家から嫁に来た。嫁ぎ先が実家に比べて山奥であった事が、気に入らなかつたようだ。村会議員を若くから務めていた母の父は若くして亡くなり、家運も傾いていた。その上戦争で年頃の男がいなくなって、目ぼしい相手との見合いがなかったのだ。その辺の事情は胸にしまい込んだままだった。◆母は私や父を叱咤激励する時に「人が笑ってやわ。そんな事をしていたら…」というフレーズを必ず織り込んだ。頭にきた私などは「ええやん。人が笑ろちゃっても」と応戦したが、勝てるわけなどない。あまりに人目を気にかける母に、父と私は呆れかえったものだ。◆幼い時から「なにくそ!と思って、気張れ」と言われ続けたせ

いか、人より出来が悪かったりすると、周りは私をどのように思っているのだろうか、他人の心を推しはかる癖がついた。こんな習性が昂じて、小学校に入ってから先生や同級生の喜ぶ事や機嫌取りにいつそう熱心になった。◆他人の思いを考えて、喜びそうなことをするという事は悪い事ではないが、本人にとって楽しいことばかりではない。人気取りや目立ちたがり屋は、周りの人の思いばかり気にかけて、自分の心の声に耳をかたむけることをおこたる。何か不祥事を起こした時は執拗に隠そうとし、見せ掛けの成果に一喜一憂し、己の心の声を聞こうとしない。母の「なにくそ!」と思って、気張れ」と励ましてくれたお陰で、怠惰な自分が少しは人並みに働くようになったのも事実だが、その反面、人の評価を気にする気性が残った。◆この歳になって「家族のため、人のため」という口上は控えて「自分の心」をのぞき見て自分に正直な生き方を探っていきたい、と思うようになった。学生時代は偏差値の数字に追われ、社会に出れば稼ぎの金の多寡に囚われる。これではいつまで経ってもコンプレックスから逃れられない。人は色々言うけれど、自分は生まれてから死ぬまで、好むと好まざるとにかかわらず自分なりの生き様をさらすだけだ。サボる事もあるが、少しでも良い生き方をしようと頑張ってきた。一番自分を良く知っているのは自分だ。◆天才バカボンの「これでいいのだ!」のように開き直って生きたい。(嘉)

** 金沢の和菓子屋さん **

師走に入ると金沢の和菓子屋は、福梅を作り始めます。福梅は加賀の藩主前田家の家紋の梅をかたどった紅白の最中皮の中に大納言小豆の餡あんを入れた、金沢のお正月に欠かせないお菓子です。

アソコの福梅は小振りだ、アツチは餡がイマイチ、ココは皮が堅い、色々言いながら御鼻ごひいきのお店の福梅が各家にあるのです。私の実家は森八さんのそばで、森八のそれは少し小振り、私は千歳の方が好きでした。千歳とは、薄い求肥ぎゅうひでこし餡を包んである山の形をした慶事のお菓子で、食後、紅の和三盆糖で桃色に染まる舌を出して兄弟で笑い転げていました。

お正月といえば、福梅と同じく欠かせないのが、辻占つじうらひです。中に謎めいた一言が書かれた紙が入っていて、大晦日の夜、辻占つじうらひいで来年を占うのです。諸江屋さんの福徳ふくとくという、小槌こづちや俵型の最中の皮を割ると中から金花糖でできた人形や土人形が出てくる縁起物のお菓子も、お正月の風物詩です。

金沢方面に旅行される方は、ぜひ、食してみてください。諸江屋さんの花うさぎという落雁、中田屋のきんつば、円八のあんころもち、竹内のみそまんじゅう、和菓子ではないですが、芝寿しという笹寿しもお勧めです。(な)

箸とめて

ふつと思ひぬ やうやくに

おもひわずらふ我をかなしむ

オリブは今どこに

くもれる空を見て わかれたる

心あはれなるかな

何もかも

行末のことみえるごとき

この悲しみは払ひあへずも

何ごとも

思ふことなくいそがしく

暮らせし一日を忘れじと思ふ

かなしみと

いはばいふべき別れの味

自分のなめしはあまりに早かり

夢さめて

ふつと悲しむ 我が眠り

亡くなれる

夫がその昔 大切にメモしたる

ノートを出して見る

かくばかり

冷き涙は いつの日にもあり

泣く日また夢にみる

思うてう

もの言はぬ人のいつまでか

このごろ石馬の耳になり

空想い

田圃に出て草の谷を目で追いな

ら「さあ頑張つて、もうちょっと」。

いつのまにか手もとに涙が流れてくる。誰かが声をかけたような…。

「おいバアさん、もう昼だよ」

振り返つてみたけど、誰もいない。

六十年間、側についてくれたのに、か

えらぬ人となつて二カ月。

やわらかにわが掌に包みこむ主人

の姿を追いもとめ、息づく重みを感じ

つつ日が暮れてゆく。

野良仕事、後期高齢者頑張つてい

る。こんな事を書いているとペンが走

る。元気なふりを装っていると本当に

元気になつてくるから、ふりをするこ

とも生活の大事な知恵かなと思ふ。

でも老後を有意義に生きる為に、も

の申す年寄りになろう。

近くの他人

♪困つたとまあ

おたがいさんだ

向こう三軒両となり

となりの人にもよびかけて

助けにゆくべや 急ぐべや

こんな歌をはつきりと憶えている。

どんなに親族を頼りにしても、遠くに

いたのではアテにならない。隣近所と

のつきあいを大事に。血族が味方ばか

りとは限らない。ということをはつき

りと味はうことが出来た昨今である。

♪力を合わせて 支えるからよ
遠慮すんなや お互いさんだ

災害は忘れた頃にやってくる。特に歳

を取ると、病氣や事故でいつ倒れるかも

知れない。

個人よりも家庭で、家庭より地域社会

のレベルで根本的に考えなければなら

ないと思う。つい数十年前までの暮らし

には、火鉢があつた。飯台を囲んでの食

事。家族が寄り合う場所であり、いつの

まにかそこに集まり、打ち解けて話し合

つたものである。

「つけ放しのテレビ」というが、今では

TVさえ個々で見ている家が多い。一人

や二人の家族ですらコミュニケーション

ンが失われつつあることは淋しいし悲

しい事だ。

「無意識に帰ってくるのも我が家なり」

まず、家庭の会話を再生することから手

がけてゆこうか。

編集後記

はやいもので、今年も年の瀬が近づいてまいりました。

ささやかなミニコミ誌ですが、この一年、ご支援いただいた方々のお

蔭をもちまして発行をつづけることができました。深く御礼申しあげま

す。

投稿してくださった原稿をできるだけ多くの人たちに読んでいただくように、紙面づくりを工夫してお

ります。仕上がりをみると、やはり

りつたないが目につき、反省することばかりです。そんな「芥川だより」

ですが、読んでくださっているみな

さまがいるということを励みに、来年もつづけたいと考えています。

どうぞ、よろしくお願い申しあげます。(嘉)

12月の芥川商店街の催し

★年末大売出し

11月29日(土)～

12月7日(日)

好評!! ガラガラ抽選です!

特賞: 西伊豆旅行ペア券

1等: 現金二万円

2等: 現金一万円

3等: 現金1千円

4等: 現金5百円

5等: 現金50円

☆☆☆☆

12月1日(月)～3日(水)

今年一年お世話になりました。

感謝を込めセール価格で提供します。

着物から服を仕立てます 梵~ほん~

冬の槍ヶ岳2

梵店主

槍平の夜明けは遅くて暗い。樹林の中にある避難小屋の横に張ったテントから見あげても、星を見ることが出来ない。

一日の行動は、一年生がテントから出て、温度計の目盛を読みあげ、空模様をリーダーに報告することから始まる。リーダーであるよっちゃんは、一年生の報告を聞いてから、「五時エッセン」と皆に告げてテントを出た。杉の間から見える空は真つ暗であったが、降り積もった新雪が辺りをほんのり明るくしていた。

今日の予定は、先発隊がルート工作、後発隊が荷揚げをする。よっちゃんと二人の二年生が先発し、後発には一年生三人が、四年生に見てもらいながら荷揚げをする。ルート工作とは新雪の斜面を踏み固めて歩きやすくしたり、危険箇所ではロープを張って滑落防止策を講じる。

冬山で最も危険性があるのは雪崩である。特に新雪の表層雪崩は少しの傾斜があれば発生する可能性がある。事故は例年起きるが、十分な対策は出来ない。

よっちゃん達の登るルートで危険な斜面は尾根の下部にあるトラバースの雪面だ。毎年雪崩を起こしている為か木が生えていない。上も下も雪面が広がっている。積雪は深いところで一メートルぐら

いだろうか、新雪の急な斜面を登ると雪が腰の上までくるので、手で雪を掻き分けカンジキを付けた足を思い切り前に振り出して進む。進む距離は微々たるものであったが、横断する為に進みやすい。

一昨年の十一月に登った白馬岳の時には、一日八時間必死にラッセルして六〇〇メートルぐらしか進まなかった経験がある。あの時はみんながガックリしたものだ。そんな事は滅多にない。温度が低くて新雪で積もる程度の傾斜があり風がなく降り積もらないとそうはならない。

6時前にテントを先発隊が出た。よっちゃんは二年生の踏み跡を壊さないように踏み固めていく。谷筋で風がないので冬といえども寒さはひどくない。

二時間程でリッジの手前まで来た。リッジの両側に雪が張り付き高度感を和らげていた。雪面にハーケンを打ちこんでザイルを固定する。四〇メートルザイルを二本繋ぎ八〇メートルに延ばした。

少し休んでいると、荷揚げ隊が下に見えた。彼らも頑張つて登ってきている。

よっちゃんも二年生の二人に「さあ、南岳までもう少しだから頑張れ！」とハッパをかけ、自分にもかけて登った。

最後の広く緩やかな斜面を登りきれば南岳の小屋が見えてくる。三千メートルの稜線に登ってきた。視界は悪い。ガスで視界が途切れる。天気が良ければ冬の穂高連峰のパノラマが望めるはずである

が、ガスにさえぎられて見えない。

南岳の小屋の近くにテントを張る予定でいたが、あたり一面風を遮るものはない。強風が吹き荒れる地形であるから小屋の中にテントを張る。

幸い避難小屋は雪に埋もれていなかった。入り口を塞いでいる氷をピッケルで取り除き中に入る。雪が吹き込んでいない六畳ほどの板間部屋が、静かによっちゃん達を待っていた。天井からツララが下がっている

今夜、他のパーティーがこの小屋に来る事はないだろうから、よっちゃん達は六畳の板間に二張りのテントを張った。小屋の中は熱気が籠もらず、テントを張らなくては寒くて寝れない。

小屋の板間の上に寝袋を敷いて寝るが、寝心地は悪い。雪の上にテントを張った方がはるかにいい。それでも、風にテントが飛ばされる危険性はないし、除雪もしなくていい。

よっちゃんは、シュラフにもぐつて明日の事を考えていた。温度も低いから槍の岩場にエビの尻尾のように雪が付いて

いるだろう。登るのが難しくなっているだろうか？ 岩場の固定用の四〇メートルザイルが三本で足りるだろうか？ 槍の頂きはどうなっているだろうか？ 雪と氷と風。一年生は上手く登ってくれるだろうか？ 心配は尽きない。よっちゃんも熟睡する事はない。

良き死とは

明石 幸次郎

良き死を迎える為にはどうすればいいのかは、我々団塊世代の最大のテーマとなつて、しかも年を重ねる毎にこの答えを出すことを自分自身に急かされる気がします。

「良き日は、良き眠りにつく。良き人生は、良き死を迎える」——これは、かのモナリザを描いたルネサンスの巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチが残した言葉です。瞬間、瞬間を良き時間にする事で、一日を終え、良き眠りについて、又、翌日それを繰り返す。その過程と延長に良き人生があり、それを全うすることで、良き死が迎えられ、後悔の無い死を迎えられるのでしよう。この偉人は晩年まで芸術家として生き抜いて後世に偉大な作品を残し、云わば“生涯現役”で一生を終えました。描くテーマを持ち、それを表現する才能とエネルギーが枯渇せず描き続けて、その良き日の延長で後悔の残らない良き死を迎えられたのです。これは、福沢諭吉が心訓の中で言っている「人生で一番楽しく、立派なことは、一生貫く仕事を持つ事である」に通ずる生き方であります。

我々のようなサラリーマンを仕事とく

本物

立木 理

ソクラテス、プラトン、そしてアリストテレスとギリシヤ哲学は続いた。

ソクラテスは「私は、自分が知らないということを知っている」といい（無知の知）、プラトンは、理想（本来の姿）の原型をイデアとよび、イデアを美と捉えて、人はイデアに憧れそこへと向かうと言っている（イデア論）。その流れをくんだアリストテレスは、初めて哲学を体系化したといわれている人で、その書「形而上学」（メタ ヒイジカ）は、確か「人間は知ることを欲する動物である」から始まっている。

「メタ ヒイジカ」とは、自然科学（今日の自然科学）の次の学問、その根底の学問と教えられた様に覚えている。人間を定義した哲学者はたくさんいるが、このアリストテレスの定義が、私には一番分かりやすい。私が子供の頃、祖母がこんなことを言っていた、「人は、汚いものと怖いものを見たがる」と。次元はともかく人は何でも知りたがるのは確かだろう。特に人の不幸や噂話を好む場面にはよく出くわす。それも知りたいと思うことの表れ

だろう。

哲学という我々日本人には人生論的印象が強いが、ギリシヤ語で哲学は「ヒロソヒイア」、ヒロとは「愛する」、ソヒイアは「智恵・知識」で、哲学とは「知を愛する」となる。

「死 その一、若き頃」に書いたように、一時期生きる意味を失っていた私は、二十〇二十一の頃、すぎるような思いで高校時代の恩師を訪ねた。その恩師は、私よりも七〇八歳年上で、思うことや意識はそんなに掛け離れていない方だった。当時私は高知市で学生生活、先生は我々が卒業した数年後故郷の奈良県の橿原市に帰り、京都の高校に通勤されていた。既に結婚されていたが、迷惑も顧みずご自宅までおしかけた。

かつて本など読んだことの無かった私であったが、大学に入ると手当たり次第に本に答えを求め続けたものの、そこに確かなものを見出せず、橿原市の先生宅へと向かう。先生ならきつと私が求めるものを提示してくださると信じ切っていたし、もうそこしか残ってはいなかったのである。四〇五年振りに出会ったにも拘らず、開口一番「先生は、何故生きて居られるのですか？」と投げ掛ける始末。兎に角答えが欲しかった。

私の問い掛けに先生は、「僕は知らな

いから」とだけ答えられた。私は愕然とする。それでは本に書いてあることと大差ないではないか。そうではなく、生身の人間として今日を何故生きているのかを知りたかった。不条理に満ちたこの世、やがて必ずやつて来る死、生きるに値するかどうかを知りたかった。単に「知りたい」との思いだけで生きて行けるものなのか。

ここにも答えは無かった。落胆なのか失望なのか、ただただ気落ちして帰路に着く。同時に、先生と呼ばれる人は、嘘でも振りでも何でもいから答えを欲しがる者に対して常に越えていなければならぬと、生意気ながらも思っただけ舞った。

それから三十六、七年の時間が流れた。未だに生きるものの確かな意味を見出せないでいるが、実はそんなものは無いのかも知れない。有りもしないことを徒に探し求めているだけのことも知れない。人はそんな風に作られた存在なのかも知れない。有るやなしやの不可解な事柄を追い求める存在として作られたが故に、「人は知ることを欲する動物」と定義され、また「僕は知りたから生きる」ということになるのではなからうか。ついにはパスカルの言う「人間は考える葦」となるのだろうか。

今この年齢に達し確かなことと思えるのは、生きた分だけ本物に近づけると



いうことである。昨日まで本物と思っていたが、今日そうではないと気付く。もし昨日死んでいたら、誤解したままであった（その方が幸せだったと言ふ人もあるだろうが）。今日に命を繋いだから贗物と知ることが出来た。またその逆も成り立つ。昨日まで怪しいとかほんまかいなと思っていたが、実はそうではなく今日日本物だと分かる。

生きることを問い続けていると、生きた分だけその遭遇した事柄の真偽が観えてくる。うっかりすると、本物を贗物、贗物を本物と誤解や勘違いをしてしまうが、命を保ち続けることによって、少なくともこの世で生起する事柄の真偽が明らかになってゆくようだ。

嘘偽りのない本物を知ることが、私たちの人生を意義あるものにしてくれるように思うのは私だけだろうか。とりわけ人との関わりにおいてより多くの本物に出会いこの世を去りたいものである。

戦後の懐かしい思い出①

戦争が終わり、久しぶりに帰宅したお寺でしたが、父が亡くなってから寺は荒れ放題になっていたこともあり、懐かしいという気持ちはわきませんでした。釣鐘堂の鐘も、寺の周囲にあった鉄柵や門までもが戦争のために徹発されてしまって、お寺はみすばらしい姿になっていたので。でも、本堂の仏様は穏やかなお顔で、私や主人を見守ってくれているにちがいないと感じました。

がらんどうのお堂や寺の入口を眺めていると、新しく寺を再建しなければいけない、すぐにはできないけれど、いつの日か必ず新しい寺を建てなければいけない、それが私達に課せられた使命なんだ、と思いました。

水洗トイレのある実家で過ごしていた私は、こちらに帰ってきて、まずトイレの臭気に馴れねばなりませんでし



た。次に不便な台所でやりくりしなければなりません。とくに水には苦勞しました。食器を洗う水もこし器でこさないといけなかった。内井戸の水は金を含んでいたからです。馴れるまでだいぶ苦勞するだろうなと思いましたが。父がいた頃は、父がいつも水をこしていてくれていたことを思い出します。

お風呂の水は少しはなれた外井戸から汲みます。以前は釣瓶で汲み上げていましたが、いまは、疎開者の人たちのために取りつけられたポンプに代わっていました。

ポンプからバケツに五十杯くらい桶に汲み入れる。量が多いので、水汲みには苦勞しました。夕方早々に火をおこします。藁で焚きつけ流木などを燃やして風呂をわかすのです。風呂焚きは重労働なので、毎日ではできない。私一人では疲れはててしまいますので、できるだけ主人の助けのあるときに風呂を焚くようにしました。生活に馴れて少し余裕が出てきたので、主人は以前勤めていた茨木の労働事務所へ挨拶に行きました。主人は「早速、明日からでも来て欲しい」と言われ、次の日から出勤しました。

戦前は勤労働員署といったのですが、戦後は職業安定所と名称が改められていました。

通勤に自転車が欲しかったので、実家の母に手紙を書いてお願いしたので。一週間程して自転車が届いた時には、本当に嬉しかった。お陰で通勤や買い物が増えました。

主人の帰郷後一年目の五月に長男が生まれます。最初の子の出産は実家で、というのが関西のしきたりでしたが、母は、身重で東京の往復はたいへんだろうからと、出産費用を送ってくれたのです。

近所の産婆さんをお願いして、出産準備をととのえたちようどそのころです。寺の前の家の方が急に腹痛をおこし、大量の虫を吐き出して亡くなられたのです。その方の悲しいお別れの野辺送りをしている最中に、私は産気づいてしまいました。急に陣痛におそわれて、そのまま男の子を出産しました。安産でした。

住職はたいへん喜んで、側にあった人形を抱いて頬ずりしているのです。そのうれしがる姿を、私はあつけにとられて見つめていました。

出産して二日目、息子のおしめを替えて何気なしに庭の松の木を見あげると、高い枝の上で蛇が長い舌を出しながら交尾を始めるではありませんか。二本の枝を使って、一メートル近い二匹の蛇が絡みあい交わりあって、下へ落下しました。蛇の交尾などなかなか

見られるものではなく、物知りのおじさんから「吉兆です」といわれました。子どもが泣いているばかりいるのでおかしいと思い、医者さんに往診をお願いすると「お乳が足りなくて、このままだと後一日位でお陀仏でしたね」といわれ、ビックリしました。私の乳が充分に出ていなかったのです。それから近所へもらい乳です。戦後しばらくは乳製品は手に入れにくく、証明書を申請してから二週間ほどかかりました。

「お腹の空いた赤ちゃんにあまったお乳はありませんか？」とお願ひして歩きました。ちようどベビーブームで、親切な人からお乳をいただき、十日ほど何とか過ごせました。自分は産後で外出できず、全て人頼みでしたが、思いがけない苦勞をしました。

私は充分に乳の供給ができない身体であるという事を知り、人から「お寺の若奥さんはドンガラダオシやな」と言われました。でも、その言葉の意味がわからず親子とも惨めな思いをしたものです。



くしてやってきた者は、ワンマン社長に上り詰める以外は、定年という区切りで会社での仕事からは決別しなければなりません。

大正、昭和初期生まれのサラリーマンは五十三歳から五十五歳位の定年まで働き、それまでに家は建て、子供はかたずけて、退職金を貰いそのお金で借家を建てて、その家賃収入でのんびりした隠居生活を二、三年はする。そういう好きな事をして送ることが出来ました。その後は身体の弱りと共に寝込んで一年位であの世に行つて、生涯を終えていました。この時代は人生六十年で、云わば平凡なサラリーマンも会社での仕事を終えれば、それがほぼ一生の仕事となり、後は孫の世話をするか、盆栽でもいじつていれば良き死が直にやって来てくれました。

今や人生八十年の時代です。定年を迎えても、それから後、二十年は生きなければ、良き死を迎える事の出来ない長寿の時代に我々は生きています。

何と平成十九年には、百歳以上のお年よりが三万人もおられるのです。これほど長生きできる現在が良い時代といえるのか、それとも問題の多い時代なのかということは、それぞれ個人の生き方で違ってくるでしょうが――。生き方の主体性、個人責任が求め

られる時代になっていくんですね。

私みたいなイージーな人生を歩んできた人間にとつては、これから何年生きるかは分かりませんが、生きるテーマを見つけれなければいけない、しんどい時代になったことは確かです。

この広い世界のあらゆるものの中で一番長く一番短いもの／一番早く遅いもの／いくつにでも細かく分けられて／どんなにでも大きく引き伸ばせる／一番無視されて一番悔やまれて／それなしには何もできぬ／卑小なものをすべてのみつくし／偉大なものをすべて生かす」これは何でしょうか？

『なぞなぞの本』福音館書店

それは「時」「時間」です。この一番遅いようで一番早いものをぞんざいに扱うことは、後悔を残すことに繋がることは間違いありません。

しかし長寿の時代の“時”を自分のものとして使えるか否かによって、これからの二十年の時を“一生を二生送れる”ことが可能な、良き時代に生きていく事は間違いありません。すべては自分にある“時”がその人の人生をどう送るかを決めて、それをどうするかは等しく自分自身にかかっているのです。どう良き死を迎えるかよりも、どうこれからの人生を生きるか、自分に答えを出していかなければなりません。

携帯エッセイ▼⑨

『女の気持』

介護をして女性の気持ちが分かるようになった。家事をするからだ。

母宅へは毎週金曜日の夜に行つて、土曜日の夕方に帰宅した。

その間は家事に追われつ放しだった。会社が終わると母の住む尼崎に向

かった。駅の近くのスーパーで買い物をする。母宅に着くと、母が笑顔で迎えてくれた。夕食を作る。母を風呂に入れる。按摩をする。寝る。朝食を作る。母を病院に連れて行く。スーパーで買い物をする。昼食を作る。掃除する。老人ホームのケアマネージャーと打ち合わせをする。夕食を作る。帰宅。そういう生活が三年間続いた。家事をしている間は何も考えなかった。刻々と時間が過ぎ去った。

『女の気持』そういう経験は初めてだった。それまでは「家事は女の仕事」。

男は外で金を稼ぐ。だから家では体を休めて明日への英気を養えば良い」と思っていた。

私のような団塊の世代はそういう価値観で育った。

「亭主関白」「男子厨房に入るべからず」が常識だった。

しかし、それは偏見だった。やって

みたら家事も悪くはない。淡々と過ぎて行く時間の中に妙な充実感がある。仕事や形而上の問題に悩んでいる暇がない。

「おそらく女性の気持ちもこんな感じなのだろう」と思った。

以来、少し女心が分かる、女性に優しく出来る、モテる、ようにもなった気がする。(龍)



あなたの心のつぶやきをお寄せください
一八〇〇二五〇字くらいで

「織田信長芥川入城」

福嶋 努

一五六八年（永禄十一年）九月、織田信長が、京都に進出しました。信長は、尾張（愛知県）の武将ですが、美濃（岐阜県）をも征服し、勢力をのばしていました。

その頃、畿内地方を押さえていたのは、阿波（徳島県）を本拠とする三好一族でした。摂津の芥川城から広く畿内に号令を発し、芥川政権ともいえるべき政権を樹立していました。

信長は、先に暗殺された十三代将軍足利義輝の弟義昭を擁して入京しました。信長にとっては、「公方様」将軍義昭擁立という大義名分のある上洛でありました。

九月二十六日に義昭が清水寺に、信長が東寺に着陣すると、洛中に立ち寄ることもなく、ただちに摂津方面への進撃を開始しました。二十七日に西岡寺戸、二十八日に大山崎へと陣を進めました。信長は、同じ日に、芥川城攻めの前哨戦として、「芥川の市場」を、先鋒に命じて放火させています。二十九日には、芥川城の城山の麓を焼き払い、勝龍寺城（長岡京市）と芥川城（高槻市）とを陥落させています。翌三十日には、信長・義昭はそろって芥川城



に入城し、当面の目的を果たし終えました。

十月二日には、芥川からは西の方大分離れたところにある池田城も落城させています。こうして、ほんの数日で、信長は五畿内すべてを制圧したのです。

三好一族の多くは、信長と戦うことなく、阿波へと逃れ、後に反撃を試みるものの、再び畿内に政権を打ち立てることはありませんでした。

信長軍が南下して高槻芥川攻めにかかった時、まず先鋒が、「芥川の市場」に火を放ち、芥川城の城山の麓を焼き払う行動に出たことは、山科言継やまのしなごみつねというお公卿さんの日記にはつきりと記録されています。「芥川の市場」というのは、西国街道の芥川宿界隈のことであったと思われる。芥川城からは三キロメートル以上も離れていましたが、

人やものの流れは西国街道にあったからなのです。芥川は、率分所という閑所がおかれるほど繁栄した町場でした。

当時の戦闘では、敵方の戦力を弱め障害物をなくすということ、放火は必ずといってよいほどに行なわれていました。戦闘の気配があると、民衆は家財道具をかかえて避難し、何とか生きのびようと必死でした。戦闘のあるたびに、多くの民衆の命と財産が失われたであろうことは、想像に難くありません。

戦国期の戦闘では、放火・暴行・掠奪はつきもので、悲惨な目にあうのはいつも民衆であったのは事実です。信長軍の進攻の際、芥川村の民衆もさまざまな悲惨な体験をしたことでもあります。

信長は、約一カ月の畿内滞在のうちの半分（十四日間）はこの芥川城に逗留し、将軍足利義昭とともに新しい畿内の枠組みを示し、政務に取り組みました。

その間、武将や商人等がお祝いのために、続々と芥川城へやってきて珍品・名品を持参して恭順の意を表わしたといわれています。城のある三好山に向かつて、貢ぎ物を抱えた人々の列が続いていたようです。芥川には各地から人々が集まり、大変な賑わいにな

った有様を「信長公記」では、「芥川城の門前市をなした」と記しています。

「①」の南西にあつて、西日本へ向かう交通の要地であつた高槻は、戦国時代の一時期には、歴史上での、きわだった舞台となつていたのでした。

（問）文章の中の「①」に当てはまる言葉を次のア・イ・ウから一つ選んで下さい。

- ア、大坂城
- イ、奈良の都
- ウ、京の都

☆芥川だよりNo.27号のクイズの答えは（イ、織田信長）でした。



あなたの街の電気屋さん

ダイコク電化 山川 修

◆ 火災警報器設置の義務化

皆さんは住宅用火災警報器の設置が義務化されたことをご存知ですか？死亡の原因の7割が「逃げ後れ」であったり、住宅火災における死者が、建物火災による死者のうち9割以上を占めることなどを踏まえ、義務化となりました。

新築住宅では平成18年6月1日より、既存住宅では、各市町村条例により、平成20年6月1日から平成23年6月1日の間で設置義務化の完了期日が定められることとなっています。

◆ 警報機ってどんなもの？

さて、とはいっても「警報機」ってどんな形をしていて、どこに設置すればよいのかわかりませんか？ ・ ・ ・ わかりやすく説明しますと、家庭から出た「煙」を検知し、警報音と音声「火事です！ 火事です！」といった具合に、知らせてくれます。

また、台所など直接「火」を扱う場所には「熱」を検知し警報音を出してくれる「熱警報機」があります。

よって火災警報器は「煙警報機」と「熱警報機」の2種類になります。

◆ どうに設置するの？

前述させていただいたように、住宅火災における死者のほとんどが、就寝時での「逃げ遅れ」による死者が多いということ、 「煙警報機」については「寝室」が必須。また、2階がある家では階段のおどりが付近に設置します。

「熱警報機」については、「台所」が多いです。高温（65℃以上）の熱を検知したら知らせてくれます。

◆ こんな事、あんな事、大丈夫？

「煙」について

★タバコの煙は大丈夫？

通常の喫煙程度では反応しません。締め切った狭い部屋で大人数で喫煙したり、検知部に煙を直接吹きかけたりすると、反応することもあります。

★仏壇の線香や蚊取り線香の煙は？

線香を1〜2本焚いたり、蚊取り線香をひと晩つける程度では反応しません。

★調理の蒸気や煙は大丈夫？

反応することがあります。調理の煙や蒸気が直接かからない場所に取り付け

てください。

★煙式の殺虫剤に反応しますか？

反応します。

くん煙式やくん蒸式の殺虫剤を使用する場合は、けむり当番にビニール袋などをかぶせ、煙や蒸気が入ってこないようにセロテープや輪ゴムなどで押さえてください。

「熱」について

★調理するときの熱で鳴ったりしませんか？

調理の熱程度では反応しません。室温が約65℃に達すると警報を発しますが、調理の熱で室温が65℃まで上がることはありません。

「その他」

★高齢で耳が聞こえにくいのですが？

警報音が聞こえにくい方には、光るチャイムの取り付けをおすすめします。

警報機と接続すれば、警報音と同時に光の点滅でお知らせします。

*

以上のようにこれから寒い季節がやってきます。直接、火を扱うことも多くなります。

本欄を読んでいただいた方々へ「火の用心」のきっかけになれば、幸いです。

また、このような便利なものも出ていますので、いざという時のためにも備えてください。商品の問い合わせ並びに設置は当店で賜りますので、よろしく願います。

(パナソニックWEBより一部引用)



煙警報機



熱警報機